

「IT時代に生き延びる中小企業の知恵」

講師 橋本 久義氏 政策研究大学院大学教授

要約: Abstract

私は1987年に通商産業省(現:経済産業省)鑄鍛造品課長に任じられて以来14年間、2,370の中小企業の工場を訪問してきました。1985年9月のプラザ合意で急激な円高となり、日本の産業の壊滅が危ぶまれていたことから始めたことです。

訪問を続けている理由の一つは、社長さんの人物的魅力にあります。大企業とは違いそれ自体に魅力の乏しい中小企業であるからこそ、社長さんには人徳・魅力があるのです。従業員を定着させ、向上心を持って働いてもらうことが必要だからです。

もう一つの理由は、中小企業の見事な工夫にあります。技術もさることながら、工場・現場での工夫に魅了されるのです。

東南アジアへの生産移転など、日本の産業の空洞化が言われて久しいですが、発展途上国にも弱点があります。第1に中小企業者の数が圧倒的に少ない。第2に技術力が乏しい、第3に日本のような絶対的な信頼感に乏しい。

確かに、発展途上国でも女子比率の高い工場は、食品加工・縫製・繊維・電気製品組み立てなどについては成功する可能性が高い。つまり、その分野は日本の産業が空洞化する懸念があります。しかし、たとえ形は変わろうとも事業の本質を外さなければ、決して産業の空洞化はしないといえます。

日本はもともと情報システムが優れています。職位の上位階層から下位階層まで全員が同じ情報を正確に共有している社会です。上位階層からの情報が付加価値を与えられて伝達されて行く。今はITという別のシステムの導入に手間取っている段階です。

しかし、異質のシステムを取込むのが上手な日本ですので、やがてITをうまく消化して、アメリカなどよりずっとうまいプロダクション・システムを生み出すと考えます。

日本は一部のエリートだけでなく、勤勉な精神が広く根付いています。この国民性こそが、アメリカ、発展途上国にはない強みです。

夢と誇りとロマンを失わず、前向きに頑張れば、日本経済は必ず再生出来るでしょう。

以上